

## 3-11. 蒜山エコツーリズム推進事業実行委員会

(岡山県真庭市)

### (1) アドバイザー派遣申請の背景

#### ●地域の概要

【人口】 5,527 人 (真庭市全体 47,858 人) ※平成 27 年 11 月 30 日現在

【面積】 189 k m<sup>2</sup> (真庭市全体 828 k m<sup>2</sup>)

【地勢】

今回派遣事業を実施させていただく岡山県真庭市・蒜山(ひるぜん)地域は、岡山県の北部、真庭市のさらに北端、鳥取県境に位置する小さなエリアです。

名称の元であり、地域のシンボルとなっている蒜山三座(上蒜山・中蒜山・下蒜山)は、西日本の最高峰、大山の外輪山で、高さ 1,100m 余りの大型のトロイデ(鐘状火山)となっており、この裾野に広がる標高 450m~600m の高原地帯で人々の暮らしが営まれています。

【気候、自然】

蒜山地域は、冷涼な高原型気候で、平均気温約 11℃、年間降水量約 2,000 mm、積雪期間は約 90 日とされています。

蒜山一帯には、ナラ、シデ、ブナなどの自然林やシラカバ林が広がり、ヒルゼンスゲ、コケモモ、イワカガミなどの高山植物も生育しています。河川には特別天然記念物のオオサンショウウオが生息しています。

【歴史】

蒜山三座の噴火に端を発する蒜山地域は、かつては川が堰き止められ、古・蒜山原湖を形成していたことから珪藻土の産地となっており、希少な湿原も残ります。また、古くから人が住みついて狩りをし、農業を営んだものと考えられ、二次草原も多く残ります。この二次草原は「大山隠岐国立公園編入」の要素にもなっています。

加えて、国史跡「四ツ塚古墳群」をはじめ各所に点在する古墳、あるいは重要無形民俗文化財「大宮踊」に代表される古い習俗や文化財など、独特の民俗文化がそのままの形で数多く残っています。

【観光】

蒜山地域は、その雄大な景観の中で、夏場は冷涼な気候を生かして避暑地として、冬は降雪を生かしウィンターアクティビティを楽しむ場としてにぎわい、西日本屈指のリゾート地として知られています。

また、日本最大のジャージー牛の産地としても有名で、メインスポットとなる三木ヶ原、蒜山ジャージーランド周辺では愛くるしい牛たちがのんびりと日向ぼっこをする牧歌的な風景が広がっています。加えて、国民休暇村や、キャンプ場(オートキャンプ場)、スキー場なども整備され、米子自動車道によって、山陽と山陰を結ぶ一大観光基地となっています。

近年は、マスツーリズムの低迷、また観光ニーズの多様化にあわせ、平成 16 年からエコツーリズムの取り組みに着手。登山はもちろん、湿原をはじめとした自然観察、また、リバートレッキングやスノーシューなど様々なメニューを提供しています。平成 28 年にはモンベルフレンドエリアの登録も完了し、アウトドアユーザーへの一層のPRを行っています。

### 【地域資源の概要】

大山隠岐国立公園の一角を成し、登山を楽しめる山々、リバートレッキングを楽しめる溪谷、サイクリングを楽しめる自転車道、希少な湿原、希少野生動植物、国史跡四ツ塚古墳をはじめとした古墳群、国指定重要無形民俗文化財をはじめとした民俗文化、岡山県伝統的工芸品・郷原漆器をはじめとした伝統工芸品 など多数

## ●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

岡山県真庭市の蒜山地域では、近年の観光ニーズの変化にあわせ、平成16年からエコツーリズムを取り入れた観光振興に着手。蒜山エコツーリズム推進事業実行委員会も立ち上がり、地元住民が主体となるガイド組織も結成され、地域発展に寄与してきた。

しかしながら、ガイド組織が活動を進める中でガイド間の認識や思いのズレから地域内不和が生じ、平成25年より協議会を休眠せざるを得ない状態になってしまっていた。

行政も再出発を図ろうと調整に入るもののうまく行かず、この状態では、蒜山地域のエコツーリズムが衰退あるいは消滅してしまう恐れがあるため、今回のエコツーリズム推進アドバイザー派遣事業により、民間・行政が再度、エコツーリズムのあり方等について再確認し、意識レベルを揃え、蒜山地域におけるエコツーリズム推進事業の再出発を図ろうとした。

## (2) アドバイザー派遣の実施概要

日	時	平成28年2月29日(月)～平成28年3月3日(水)
場	所	岡山県真庭市蒜山地域 ほか
アドバイザー		公益財団法人日本自然保護協会(NACS-J) 参事 横山 隆一氏
参加者		計20名
スケジュール・方法		<p>【1日目】</p> 視察（半自然草原火入れ地にて草原維持のための取り組み等解説（降雪のため車窓からの見学のみ）、蒜山ワイナリー、ひるぜんジャージーランド、津黒高原荘） <p>【2日目】</p> プレゼンテーション、ディスカッション①②③ <p>【3日目】</p> プレゼンテーション、ディスカッション④、まとめ、真庭市行政として努力すること、視察（津黒いきものふれあいの里、湯原オオサンショウウオ保護センター）

### (3) アドバイスの内容（議事録）

#### プレゼンテーション① エコツアーとエコツーリズムの中のエコツアー

##### ★エコツアーの起源

1970年代後半、自然好きのアメリカ人が南米の森林とそこに住む原住民の人々の生活をを守るため、集落が持っている森を自然保護地域とし、ツアーを企画し、そのツアー代金(ガイド料金)を収益として原住民に渡したことが始まり。

その活動が森林環境を守る手段(動機づくり=モチベーション)として先住民に広まり、うまく機能していった。※資金調達=自然保護に必要なお金(経費)を作る、≡稼ぐ

- 例)
- ・エクアドルのガラパゴスの生き物ツアー
  - ・東アフリカの野生動物ハンティングツアー、ウォッチングツアー
  - ・オーストラリア、メルボルンのペンギンパレード見学ツアー
  - ・スリランカのワイルドライフガイドツアー
  - ・ヨーロッパアルプスの氷河遺産地域トレッキングツアー  
→各国で特色ある「自然観光」に発展

##### ●日本でのエコツーリズムの動き

1992年 自然保護協会による各国視察、事例研究

2008年 エコツーリズム推進法

##### ★日本のエコツーリズムの定義

旅行者が自然観光資源を知るガイドにより案内や助言を受ける。自然の保護に配慮しつつ自然や人とふれあい、知識や理解を深めるための活動

→実際にエコツーリズム地域をつくるために必要なことは、、、

- ・ まず推進協議会を設立し
- ・ 魅力あるものの実態調査、保全対策、利用ルール、ガイドプログラム、広報ツールの作成、人材育成、モニタリングをし、
- ・ 観光産業の育成と持続可能な地域づくりをしていくこと。

##### ★エコツーリズムの主目的、力点の置き方は、各地域で異なり4タイプに分類される

- 1) 自然環境保全の動機と資金の確保(ex. ガラパゴス)
- 2) 自然資源収奪型産業、消耗枯渇型産業→持続可能な地域産業への転換(途上国型)
- 3) 貧困からの脱出と自立可能な経済社会への転換(途上国型)
- 4) 大観光地集中型の観光(マスツーリズム)から、地域資源を活用した分散型観光への転換(先進国型)  
←大山と蒜山が競争しない

##### ≫エコツーリズム推進法に内在する問題

- ・ マスツーリズムのエコ化(←マスツーリズムはやめないが、そこに集まる人たちの動きをエコに)
- ・ 里山保全、ライフスタイル体験、アドベンチャーツアーなど、エコツーリズムとの区別がはっきりしない
- ・ 集客と資金の流れの仕組みが作れない

⇒なんのためにやるのか、みんなで共有してからでないといいものが生まれない。法律自体が課題を抱えているため、法律や役所の人たちに何とかしてくれではないいいものにならない。法律を何度も改正していく必要がある。

★エコツーリズムが求められる理由

- ・ 世界的な生物世界(人間ふくむ)の持続性の危機
- ・ 経済優先型社会による環境の劣化と地域文化(伝統地、少数言語)の喪失
- ・ 地球規模では人口が増え続けている。人の社会の持続的確保が優先事項
- ・ 20世紀型物事からの脱却が多ジャンルで試みられている

★生物世界の健全さが人間にとっての「生態系サービス」を生み出している。

安全、健康、生活の基本物資、良好な社会的関係、選択と行動の自由は、豊かな自然の恵みがあってこそもたらされるもの。自然界が健全でなくなると、人を支える力をなくす。

～世界的に顕著に低下している生態系サービス→漁獲量、野生の食糧(はちみつなど)、木質燃料(焚木)、真水など～

消耗枯渇型 20世紀型「エゴロジア」 ⇔ パートナースhip型「エコロジア」

↑エコツアーは「エゴロジア」型社会の中でやると、特定の人が儲かり、自然は貧しくなる、世界は狭くなる。反対に「エコロジア」型社会でエコツアーをやると、共有が生まれる。世界は広がる。人の輪は広がる

「旅行」の定義：人が空間的、物理的に移動すること。交通手段を用いて移動すること

「旅」の定義：定まった地を離れて、ひと時ほかの土地へゆくこと

→ 私たちが言うエコツアーは「旅行」ではなく、「旅」

いい体験をしたら、元の土地に戻り、その経験を活かす、新しい見方を得るための「旅」であるべき。

◎エコツーリズムに基づく、エコツアーであるべき

---

質疑応答

Q年配のボランティアガイドがエコツアーを支えている現状の中で

収益を上げ、ガイド料をまかなえるようにし、若いボランティア育成が必要では？

A五色が原の事例

利用料とガイド料からツアー代金を決定。

条例をもとに、エコツアーのシステムづくりをしている。

Q行政が中心となって協議の場を設けることが必要では？

A行政だけではダメ。65点の行政の力と、35点の推進協議会(市民)の力が必要

---

## プレゼンテーション② 旅の目的とエコツアー

★旅の目的を何にするか、考えてみよう！

- ・現代の日本人は「都市化」し、固定観念の中で生きている
- ・自然観察ができるようになると、生活の中にはない多くのことが得られるようになる

- 例)
- ・自分の心と体の健康
  - ・隣人との出会い
  - ・野生の生き物との出会い
  - ・知的好奇心の刺激
  - ・環境変化への対処
  - ・身のこなし方の変化
  - ・自分の見方の癖に“気づく”  
→ “やってみたい” “学んでみたい” という気持ちが生まれる  
⇒自然を学ぶのではなく、自然から学ぶ

★エコツーリズムとは教育活動である

- ・ 「良いエコツアー」を行うことで「良いエコツアーリスト」が育つ  
→そのためにたゆみない毎日の努力が必要になる。
- ・ 作り出す努力が必要
- ・ 固定観念の中で決断し続けてはダメ
- ・ 無関心が一番ダメ

---

### 質疑応答

Qガイドたるもの道案内ではダメ。価値や物語を伝えたい。どういう心構えで望めばいい？

スキルアップの手法は？どうやってモチベーションを維持していく？

A “持ちたい” “なりたい” と思えば満点！知識の多さではない。常に気にすること、モノにしてやろうという意欲。それらはすべて『自覚』から始まるものであり、毎日の努力につながる。

Q安価なツアーが横行して困っている。目的に応じた住み分けが必要では？

A根本として、安価が“悪”ではないということの理解も必要。一方、閉じたエコツーリズムは老いて終わる。どうやって地域のバランスを取っていくのかはある程度の話し合いが必要。

---

## プレゼンテーション③ いろいろなものの持続性をもつ手段

★【持続性】がキーワード。

- ・ 今、担い手が激減している。昔は地域は地域で守られてきた。ところが次の世代には今のままでは望めない  
→持続性が必ず必要になる。
- ・ 持続させるために消耗型エコツアーではいけない。
- ・ 自然の恵みが人間の恵みになるまでを見せられなければならない  
→取り出せる力＝ガイドの存在
- ・ 公益性を持たせることも大切。この考えから生まれたのがエコツーリズムの中のエコツアーである。
- ・ 協働とはパートナーシップ、人と力を合わせるということ

## プレゼンテーション④ エコツアーのイベント化・商品化・事業化？

### ★エコツアーには様々な業態が存在する

- ・ 世の中には無料なもの、安価なもの、高価なもの、様々なエコツアーが存在する。かといってそれぞれのイベントは間違いではないし、否定も制約もできない（もちろん便宜を図るばかりがサービスでもない）。
- ・ 新たな業態を始めるということは常識を破ること。古くからの業態の人にはこれまでの努力や自負があるが、時代の要請であるのであれば、誰もが認め合わなければならない。古くからの業態の人にも受け入れなければならないし、新たな業態を始める人たちも古くからの業態を疎かにしてはならない。  
⇒共存の方法…内容を区分する、得意分野を分け合う、時間を融通しあう など
- ・ 価格等については地域で相談する場があってもいい。新たな業態が始まろうとしているのであれば、便宜を図っていくことも必要。調整がつかないのであれば、違いをしっかりと伝えていき、区別していく努力も必要。

### ★エコツアーの区分は「イベント」「商品」「事業」の大きく3つに分類される

- ・ 「イベント化」とは、イベントを実施したり、学校行事や林間学校などを行うこと
- ・ 「商品化」とは、ツアーを提供し、お金を払っていただくこと。  
→商品化はだれでもできる
- ・ 「事業化」とは、常に振り返りや検証を行い、自立した行動にしていくこと

※自然を守る方法を考えるのがエコツーリズムであり、エコツアーがアウトドアスポーツに引っ張られないよう注意しなければならない

### ★プロはプロらしくあれ！（チェックリストを用いて説明）

- ・ お金をいただくということは、お金と引き換えに提供しなければならない義務が発生するという事を自覚しなければならない
  - ・ 振り返りはとても大切
  - ・ リーダーシップは発揮“しなければならない”。指示命令で良い！
- 例) - 安全管理  
- グループコントロール  
- タイムスケジュール

---

### 質疑応答

Q 旅行業の問題が常につきまとう

A これは全国的な問題。違法行為は避けてほしい。タクシーや宿泊施設との協働などでクリアして欲しい。

国の動きにも注視して欲しい。

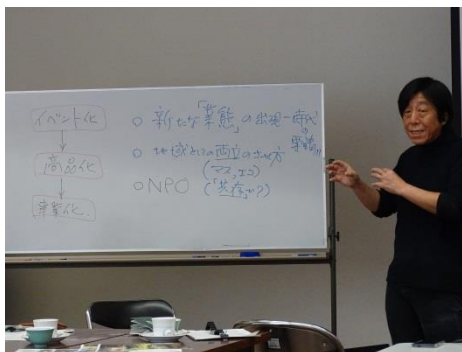
Q 教育旅行等で常に“同じ体験”を求められ苦慮している

A 自然の中で全く同じはあり得ない。そういうときは『自然のせい』にしてしまうと良い。

## 【記録写真】



講師の話に聞き入る受講者



丁寧に説明くださった横山先生



休憩中も意見交換する参加者

## (4) アドバイザー派遣実施の効果

### 1) 参加者や関係者に与えた効果

- ①エコツーリズムについての理解醸成が進み、地域で主に取り組む団体間の共通認識が図られた
  - ・ 「エコツーリズムとは何か？」ということを確認できた
  - ・ エコツアーにおけるガイドのあり方、役割等に対する意識が高まった
  - ・ エコツアー推進の大きな足かせとなっていた「ガイド間の認識のズレ」を修正することができた
- ②組織で考え方や取り組み方が違う中で『共存』の可能性を見出すことができた
  - ・ これまでは考え方や取り組みの違いが一部で『場所を荒らす』『営業妨害』といった思いにつながってしまっていたが、「イベント」「商品化」「事業化」という3段階のステップを明示いただくことで、それぞれの組織のポジショニングが明確になり、地元の中にも『共存』という考え方が芽生えた
- ③蒜山エコツーリズム推進事業実行委員会再始動の大きなきっかけとなった
  - ・ 休眠状態となっていた蒜山エコツーリズム推進事業実行委員会の必要性を再認識することができた

## 2) 今後、期待される効果（具体的な活動の展開など）

- ・ 地元ガイドの資質向上、組織力向上
- ・ ガイド組織間の相互理解の深化、共存・協力関係の構築
- ・ 行政イベントとガイド組織が実施するエコツアー商品・エコツアー事業の相互理解の深化、協力関係の一層の強化、共存の実現
- ・ 蒜山エコツーリズム推進事業実行委員会の再始動と地域全体での組織力強化
- ・ エコツーリズムの中のエコツアーの一層の推進

## 3) 今後の取り組み

- ・ 蒜山エコツーリズム推進事業実行委員会の再始動

## (5) 今後の取り組み推進にあたり参考になった事項、その他感想

---

### 1) 参考となった事項

- ・ 共存こそ課題解決のための唯一ともいえる手段であること
- ・ 「イベント」「商品化」「事業化」という3つのステップで考えていけば共存の道は開かれるということ
- ・ ガイドにとって知識はもちろんのこと「資質」が重要であること

### 2) その他感想

- ・ 後にも書かせていただきますが、課題解決に向けた的確なプログラム構成、アドバイス、落としどころと、非の打ちどころのないものでした。様々な研修を経験している参加者も納得の様子で、感謝の言葉を数多くいただきました。
- ・ 課題の中心だったガイド団体間の認識のズレも一定の統一を図ることができたと感じております。早いうちに次の場を設けたいと思います。



## (6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

横山 隆一氏 (公益財団法人日本自然保護協会 (NACS-J) 参事)

### 1) 地域における取組の現状と課題

#### ①現状の取組

凡そ10年前からエコツーリズムの取り組みを進め、事務局を当初の市から地元の観光協会に移したが、現在は休眠状態とのこと。その中で、ボランティアベースのガイドグループ、有料ガイドツアーの事業化を図ろうとするグループ、それ以外の観光と教育に関心を持つ個々のガイド希望者に分かれて、前二者が反目し合いながらそれぞれ催しものが企画実施されているとのこと。エコツーリズムを進めるための相互協力や、事態の改善のためのコミュニケーションは全くなく、折り合いのつけようがないという中で実施した。

#### ②課題

そもそも、エコツーリズムをこの地域に導入しようとする目的、地域が必要とする観光と観光客層の今後の理想像、そのための手段や体制と人材の将来像等が定まっていないこと。また、エコツーリズムを進めようとするのと、地域の社会環境・自然環境の関係や観光との関係の整理や達成したい状況といった「目標と道筋」が整理も共有もされていないこと。

### 2) 特に魅力を感じた地域資源等

#### ①魅力を感じた地域資源

日本海側の環境条件に支配される地域で、土地固有の自然林を持つ山岳地域と清冽な水のある溪流環境は、魅力的。過去の家畜生産によって作られた、維持に火入れを必要とする山麓部の半自然草地やその中に広がる里地の希少生物種の生息環境は、維持していく環境上の価値は高い。現在も続く一次産業と二次・三次産業に使用されている平たん部がこれらと組み合わせたり、旧来の開拓地・観光地・別荘地と観光農園・畑地と集落等の広がりの中には、多くの「地域知」の素材が見られる。また、「生きものふれあいの里」のフィールドとビジターへのサービス施設も近隣にあり、観光と教育啓発活動のフィールドには恵まれていると感じた。

#### ②上記地域資源に魅力を感じた理由

地域の自然誌と人間社会の歴史の関係が表出しているため。

### 3) アドバイス（講義等）の概要

共有のテキスト(目的・目標・手段を理解する教科書)がない中での対立と軋轢、対抗的な個々の解釈の押し付け合いが起きていると考えられたため、そもそものエコツーリズムが生まれた背景や意図の解説から始まる講義とそれについて討議する全体ディスカッションを各一時間半程度行うことを1セットとし、テーマを深めつつこれを1.5日間に五回繰り返した。詳細は、報告会でのPPT参照。

### 4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

#### ①全体構想への取組状況について

ようやく、構想や共通の達成目標をどのようなものにしていくかを検討するスタートラインに立ったと思えるが、法に基づく構想を作り、認定を受けるかどうかは検討中とのことであった。

#### ②全体構想策定への意向について

同上。

#### ③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

この地域における、エコツーリズムの形、位置づけ方、地域社会の関わり方の確定と、ガイド候補者たちの意識との整合を図ることか。

### 5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

場と施設と人材と動機は理想的な形で存在しているので、コミュニケーションを深めて官官、官民、民民共に協力しあえば、かなりのものが作り出せると思われる。コミュニケーションのコーディネーターの中心をなす、数人の中立的で意欲的な協働取り組み推進グループをまずは作られたらどうか。